

国内視察概要

一週間という短い滞在期間での視察を実り多いものとすべく、本事業のアドバイザーの北脇教授と田村氏とともに視察先を検討した結果、九〇年代以降のニューカマーの住民が多く、近年特にユニークな活動が見られる岐阜県の可児市・美濃加茂市、他方、明治開国以来の国際都市で多くのオールカマー住民とともに近年はニューカマー住民も数多くいて、更に九五年の大震災以来NGOや行政の活発な活動の結果「多文化共生」という用語が一般に市民権を得るきつかけとなった神戸市を視察することとなった。

一〇月二日に随時欧州より到着した一行は、一夜明けた一月一日の午前中に、先ず北脇教授より、日本の外国人住民をめぐる現状やその政策についてのオリエンテーションを受けた(写真①)。事前に各々予習してきたメンバーからは、背景にある日本の教育制度や労働制度にまで及ぶ質問が次から次へと挙がった。こうした熱心な様子は、視察旅行の間、常に見られた。そして、サンドイッチの昼食もそこそこ東京駅に移動して新幹線に乗り名古屋へ、そこから最初の視察先である可児市・美濃加茂市へと向かった。

可児市（岐阜県）

到着早々、可児市多文化共生センター「フレビア」で行われた多文化共生フェスティバルに参加。このフェスティバルは、外国人住民の持ち寄り料理や作物・手工芸品などの出店、或いはのど自慢大会やビンゴゲームなどのある、日本人住民も参加するお祭りである。フェスティバルの最後に駆け込む形で、ブラジルのカポエイラやフィリピンのゴンドアダンスのデモンストレーションを見せていただき、最後はメンバーも一緒にダンスを楽しんだ(写真②)。

翌朝は、先ず山田豊可児市長を表敬訪問した(写真③)。次いで、再び可児市多文化共生センター「フレビア」に行き、可児市役所の加藤エジソン氏より英語にて可児

市の多文化共生政策をお聞きした。ご説明の途中からも次々と質問が挙がり、その後は会場にいらしていた外国人住民とメンバーが個別に率直な意見交換を行った（写真④）。

次いで、可児市の外国人児童対象適応指導教室「ばら教室KAN-1」を訪問した。三段階ある同市の外国人児童適応制度の最初の段階を担う。室長の天池氏から活動のご説明をいただいた後、メンバーは同教室の子供たちとともに、先ずは日本の小学生と同じような教室の掃除を体験した。それから、授業のひとつ「ひらがなビンゴゲーム」に参加し、子供たちにひらがなを教えてもらって楽しんだ（写真⑤）。更に、子供たちが掘って用意してくれた焼き芋をいただいた。メンバーからは、子供たちとの貴重な体験もさることながら、三段階のシステムが非常によくできている、またこうした行政主導の教室の存在自体、ヨーロッパでは聞いたことがなく革新的である。といった感想があった。（写真⑥）

それから、可児市文化創造センターa2bを訪問した。施設見学の後、同センターが制作した「多文化共生プロジェクト“危機一髪”」のダイジェストDVDを演出家の田室寿美子氏の解説とともに見せていただいた。この作品は一〇ヶ国・五〇人の市民が作り上げた舞台上で、在住外国人の視点から見た「日本の今」や彼らの「人生」が切り取られていた。その後、出演者の方たちと意見交換。非常に有意義な試みとの感想がメンバーから続いた（写真⑦）。

夜は可児市・美濃加茂市合同のレセプションがあった。山田可児市長や海老和允美濃加茂副市長はじめご来賓の方々、両市の市役所、NGO、外国人住民の方々との交流や意見交換が活発に行われた。また篠笛や、尺八と琴の演奏も披露され、一行は日本伝統の一端に触れることができた（写真⑧）。

美濃加茂市（岐阜県）

一月三日は美濃加茂市公民館を訪問し、美濃加茂市の多文化共生政策をご説明いただいた。特に同市の多文化共生推進プランには賞賛の声が挙がった。その後、美濃加茂市定住外国人支援センターの渡辺マルセロ氏より同市の日系ブラジル人の状況と同市の支援体制のご説明があり、一行は政策と状況についてより深い理解を得ることができた（写真⑨）。

続いて中山道会館に移動し、渡辺美濃加茂市長や同市役所の方々、それにブラジル友の会の会員の方々の懇談会となった。ここでも個別にさまざまな質疑応答があり、例えば日本の町内会が外国人住民を一般住民とつなぐ機能を果たしていることに強い関心もたれた。懇談会に続いて、同会館内で美濃加茂の郷土料理を囲んでの懇親会となり、同会館のスタッフも含めて和気あいあいとした雰囲気の中での交流会となった。（写真⑩）

その後、美濃加茂市を発つて名古屋に行き、再び新幹線に乗ると、一行は神戸に向かった。

神戸市（兵庫県）

一月四日、まずは神戸市役所を訪問し、港の開発を初めとした市政や、一九九五年の阪神・淡路大震災からの復興に続いて、同市の多文化共生政策について詳しくお話を伺った。特にメンバーからは、外国人市民の意見を市政に反映させるための外国人市民会議や、外国人へのワン・ストップ・サービスを提供する神戸国際コミュニケーションセンターなどに対して強い関心が示された（写真⑪）。

次に同市長田区にあるNPO法人定住外国人支援センターを訪問し、理事長の金宣吉氏より日本における外国人住民をめぐる状況や、同センターの活動についてお話を伺った。

また同センターが運営する在日韓国・朝鮮人高齢者のためのデイサービスセンター「ハナの会」も訪問し、活動を具体的にみる事ができた。(写真⑫)

続いて、同じく長田区のNPO法人たかとりコミュニティセンターを訪問した。阪神・淡路大震災の際の救援活動拠点を前身とする同センターは、この地域で、言葉、文化、民族、国籍などを超えて同じ住民として一緒に新しいまちをつくることをめざし、敷地内の八団体がネットワークを組んで活動している。先に訪れた定住外国人支援センターも、もともとはこのセンター内の一団体だった。ここでは、同センター常務理事で多文化プロキューブ・グループ代表の吉富志津代氏より、センターの活動説明や施設案内をいただいた。阪神・淡路大震災直後から復興の様子を写した展示コーナーや震災直後に建てられた「紙の教会」をベースにした教会堂などをメンバーは熱心に見てまわった。その後、同センター内で、ペルー料理、韓国料理、ベトナム料理、ミャンマー料理、スペイン料理などの各国料理を囲んでの懇親会となった(写真⑬)。これも同センターの活動のひとつで、各国料理の料理教室やデリバリーを行っている。また同センターは各国語のFM放送を行っているが、同日夜のスペイン語放送に急遽一行のメンバーの中でスペイン語を話せるブツェンコ氏とサラマ氏がゲスト出演することになり、日本の印象などを語っていただいた。(写真⑭)

翌一月五日は、海外移住と文化の交流センターを訪問した。同センターの経緯や活動、また日本の移民の歴史についてご説明いただき、かつて多くの日本人がブラジルをはじめ海外に移民として移住した歴史を見ることができた(写真⑮)。

こうして、短いながら充実した視察を終えて、一行は東京に戻り(写真⑯)、一一月六日のシンポジウムを迎えた(写真⑰～⑲)。